7 月 23 日のメッセージ

聖書：フィリピの信徒への手紙　4：　1－3

「二人の婦人」

先日、電車内である動画広告を見ました。車内なので無音だったのですが、漫画の一コマが連続していくような、そのような広告でした。

「オギャー、オギャー」という赤ん坊の泣き声に次いで「はいはーい、今いくねー」という台詞が表示されます。次のシーンは、食卓の様子と同時に「ご飯だよー」の文字が。学校とおぼしきシーンでは、「将来の夢はパイロットです」。たくさん並んだ熊のぬいぐるみを前に、「ピンクがいい」。枕元の体温計と共に「子どもが熱を出したので、有給取らせてください」。

最後に「聞こえてきたのは、男性の声ですか。女性の声ですか」という文字が映し出されました。

これは、ジェンダーバイアス(男性はこうあるべき、女性はこうあるべきという偏見)について警鐘を鳴らすAC ジャパンの広告キャンペーンです。確かに、専門学校で教えていても、牧師＝高齢の男性というイメージが堅くすり込まれているのを感じます。「女性教職もいる」と言うと、一様にびっくりします。

一方、教会の礼拝出席者は圧倒的に女性が多いことは、皆さんも体感しておられることでしょう。にもかかわらず、教区総会や教団総会ではそれが逆転するのです。教団の三役はもちろん全て男性です。教職、信徒併せて 27 名が選挙される常議員のうち、女性は 4 人しかいません。

では、聖書は女性の活躍を望んでいないのか、と問われれば、さにあらず。多くの女性が活躍する姿を聖書は描き出しています。

例えば、モーセの命を救ったのは女性たちでした(「王女が、『この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。……』と言ったので、……王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて……」出エジプト記 2:9-10)。モーセの姉ミリアムは、モーセ、アロンと並んで、主から遣わされた一人とされています(「わたしはお前をエジプトの国から導き上り／奴隷の家から贖った。また、モーセとアロンとミリアムを／お前の前に遣わした。」ミカ書 6:4)。エリコの町を探りに来たイスラエルの斥候を救ったのは遊女ラハブでした(「王は人を遣わしてラハブに命じた。『お前のところに来て、家に入り込んだ者を引き渡せ。……』女は、急いで二人をかくまい、……」ヨシュア記 2:3-4)。デボラは神から士師に任ぜられ、裁きを司り、イスラエルを導きました(「ラピドトの妻、女預言者デボラが、士師としてイスラエルを裁くようになったのはそのころである。」士師記 4:4)。エステルは王妃になり、イスラエルの民を危機から救い出します(「モルデカイは再びエステルに言い送った。『……ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。』」エステル記 4:13-14)。イエスの下にも、何人もの名前が残っている女性たちがいました(「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。」ルカによる福音書 8:2-3)。

もちろん、名前の残っていない人たちもたくさんいたはずです。

そして、フィリピの教会にいた、エボディアとシンティケという二人の婦人たちもまた、教会で指導的立場にありました(「わたしはエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱きなさい。なお、真実の協力者よ、……この二人の婦人を支えてあげてください。」フィリピの信徒への手紙 4:2-3)。教会は二人と共に歩んでほしい。また、二人は二人で仲違いをせず、共に手を携えて教会をもり立ててほしい。そう願われています。

教会は常に平等を説き、世の価値観に抗い、新しい地平を切り開いてきたのではなかったでしょうか。日本で最初の女性医師となった荻野吟子は、日本組合教会本郷教会(今の弓町本郷教会)で聖書を学び、神の言葉を聞き、洗礼を受けました。聖書の言葉が支えとなり、厳しい状況も苦しい状況も歩んでいくことができました。

男性である、女性であるを問わず、神は常に導き、守ってくださいます(「神に従う人のためには光を／心のまっすぐな人のためには喜びを／種蒔いてくださる。」詩編 97:11)。いや、区別する必要さえありません。どのような属性であるかを問わず、神はその全てを良いとされたのではなかったでしょうか(「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」創世記 1:31)。

「今さえ良ければ」、「自分さえ良ければ」に安住することなく、いつも新しい時代に向かって開かれていく。教会はそのような使命を帯びています。もちろん、そこに集う私たちも同じでしょう。

今一度、自分の、自分たちの価値観を問い直す一週間にしようではありませんか。